日記

黒時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日記

【Ｎコード】
Ｎ７２４１Ｑ

【作者名】
黒時計

【あらすじ】
ある日、日記を書いてみようと思った。

0日

夕飯を食べているときにふと目に入ったのは、空白の本。
目立った装飾はないが、丈夫そうな造りだ。
見た目も落ち着いた深いこげ茶色で、一見地味に感じるその色合いが、自分に合っている。
流浪の民から貰ったもので、『字が書けるようになったら好きなことを書いてみると良い』と渡されたことを思い出した。
この本を今までは思い出すことがなく、また、渡されたとき以来見た記憶もなかった。
特別な本ではあるんだろうけど、ぼくにとっては唯の白紙の本でしかない。
理由はないが不可思議な衝動で沸き起こるので本を開く、書きたいこと……特にはないので日記帳として使ってみることにした。

1日

ソーセージを焼いてみた。
ちなみに朝は寝坊したので昼食を兼ねた今日初めての食事だ。
軽く火にあぶるだけのつもりが、少し目を離した隙に破裂。
破れた薄い皮からは肉汁が溢れてしまった。
皿に盛りつける頃にはしわしわになっていて食欲が減る。
試しに食べてみたが、乾物のような食感がする。
食べれなくはなかったが、美味しさが半減した気がする。
次は目を離さないようにしようと思った。
食欲を満たした後は軽い運動をするべきだろう。
散歩がてら家の付近を歩き回ってみる。
場所は裏手にある小さな森だ。
この森には名前が付いているそうだが、覚えていないのでそう呼んでいる。
祠付近で休息をとってから家へと帰った。
良い天気だった。
軽く昼寝してもよかったかもしれない。
明日も晴れたら森に行こうと思う。

2日

『ノイ』と呼ばれた。
それは俺の名前。

今日は久しぶりに夢を見た。
夢の中で懐かしい人に名前を呼ばれた。
起きた途端に声の主が誰だったのかを忘れてしまう。
やがて夢を見たことすら忘れてしまいそうだったから、夢を見たという事実だけは日記に残しておくことにした。

今日は昨日の予定通り森に行く。
昼食にとサンドイッチを片手にぶら下げてだ。
ハムと卵とレヂタの葉をパンに挟んだもので大変手軽に作れる。
祠まで歩く道すがら花が咲いているのを見つけた。
季節がまだ早いせいか、一輪だけ咲いている。
小さな花だ。
しげしげと眺めると風が通り抜けていく。
少し肌寒く、思わず鳥肌が立った。
いつもより時間をかけてたどり着いた祠には先客がいた。
茶色の毛並みで脚が細長く、四足歩行をして移動する動物だ。
悠々と寝そべって低くなった頭を撫でてやると嬉しそうに鼻を寄せてきた。
可愛かった。
持ってきたサンドイッチを一緒に食べる。
ハムと卵はお気に召さないようでレヂタのサンドイッチだけがすぐになくなった。
満足したのか、一声鳴くと森の奥へと帰っていく。
日はまだ高く昇っているので、祠のさらに奥にある湖に行った。

水浴びをすると、冷たかったので土に掘られた穴に水を入れ、火で温めた。
熱くしすぎたので水を足して加減を見る。
丁度良い温度に出来たので気持ちよかった。
たまに冷たすぎたり熱すぎたりするから。
お湯からでたら直ぐに湯冷めをしないうちに家に帰る。
途中でまた一輪、花が咲いているのを見た。
もうすぐ萌葱の季節だと感じられる1日だった。

3日

背が早く伸びてほしい。
つくづくそう感じる日だった。
今日もまた、森へと散歩に出かけてみると、真っ赤な実を見つけた。
丸々と大きく育っていておいしそうだ。
わりと低い位置に実っていたので手を伸ばす。
しかし、僅かに届かなかった。
爪先立ちをしてもぎりぎり指が届くか届かないかの距離。
どうやったらとれるのかとうんうん唸っているうちに、横から飛んできた鳥が持っていってしまった。
ショックだった。
なんとか背を伸ばそうと、家の中の書庫を探ってみる。
埃っぽい匂いが鼻を刺激してくしゃみが出てしまう。
小一時間たったころにお目当ての本を見つけた。
どうやら背を伸ばすには、乳白色の液体を飲むと良いと本に書いてあった。
乳白色の液体といったら、ボンド草という植物から取れるはずだったと記憶している。
そこで再び森の中へ入っていった。
見つけるころには日は沈みかけて、空は茜色に染まろうとしている。
いつもよりも急ぎ足で家路へついた。
鍋でコトコト煮込んで、布で搾り取っていく。
皿の中には、真っ白な液体が広がった。
さっそく飲んでみたが、なぜか口が開かなくなってしまった。
その上、唇がピリピリとする。
図鑑で調べてみたら、どうやらその植物は物をくっつける力があると書いてあった。
どうやら食用ではなかったようだ。

この顔全体に広がるような僅かな痺れはそのためだろう。
幸い、毒性はないようで効果を打ち消す植物を塗りこんだら若干の不調は残ったものの、問題もなく治った。
口の中が苦い。
次からは口に入れるものは安全を確認できることを調べてから含むことにした。
結局すぐに背が伸びるという方法がないことはないことが分かったので、それ以外の方法で状況が改善されるようにすることにする。
まずは、木を組んで人が乗れるようにすることからはじめよう。

4日

樫(かし)という木が丈夫なことが分かった。
昨日の宣言どおり、早速木を組んでみることにしたため、身近に落ちていた木を寄せ集めてみたのだが、乗ったとたんにポキポキと折れてしまう。
そこで頑丈な木を探してみたところ、この樫という植物がよさそうだった。
もっと重厚そうな木もあったのだが、あまり力がないため加工するのは難しそうという理由のために断念せざるを得ない。
まぁ、もっと経験をつめばどんな木でも伐採することは可能になるだろうけど。
倉庫から斧を取ってくると木の腹に振り下ろす。
ガツンと堅い音がして歯が欠けた。
それにもかまわず降り続けるとミシミシと音を立てて倒れた。
危うく下敷きになりそうになった。
切った方向に倒れてくるなんて…。
次からは注意を払っていたので難なく避けることができた。いくつか採ったところで今日の作業を終了する。
疲れた。
暫くは切った木は地面に転がしておく。
乾燥させる必要があるからだ。
明日は蔦でもって取ってこようと思う。
ついでにボンド草も探してみよう。
慣れないことをしたため、いつも以上に眠れそうだ。

5日

息抜きにタロットをやってみたよ。
今日は森でツタを探す予定だったけれど雨が降った。
なので室内でできることをすることにして、机の引き出しからタロットカードを出す。
やり方は簡単で、束をシャッフルしたら好きなカードを引くだけで良い。
何故かは知らないけれど1日に1回しか占ってはいけないと言われた。
なんでかと聞いたけれど教えてくれなかったので理由は知らないまま。
ただ、分かっていることはこのタロットカードは特殊なんだろう。
だって、よく当たるんだ。
教えてくれた人は当たらなかったのにオレがやると外れることがほとんどなかった。
『きっとこのカード達は君のことが好きなんだね』って言ってたし。
そうなんだって納得して、大切にしたいって思った。
後になって知ったことなんだけど、普通はただの道具に心なんてあるわけないって意見がとても多いことを知った。
中には信じている人もいるみたいだけれど・・・・・・それは一般的じゃないみたいだ。
魔道具なら心とは呼べない意思があると答えても、ただの【物】にはありえないと否定された。
その日は悲しくてふてくされていたのを覚えてる。
夕飯は簡単にサーサの葉っぱにごはんをつめて蒸したものを食べた。
塩味がほんのりと効いていて、ホッカリとできる。
箸を使って口に運び入れるとおいしかった。

そういえば、今度流浪の民が来るって手紙が来た。
いつも鳥が運んできてくれて、そのこの眼がまたくりっとしててかわいいんだよ。
シイの実が好きだから用意しておいてあげなくちゃ。

6日

２本の蔦を編み併せて丈夫な紐を作った。
雨のせいか湿っていて、予想より細く出来上がりそうだ。
天気が良いです外で作業しながら思う。
潰して潰して、併せて併せて長めの紐を何本も作っていく。
予定より早い、おなかが空く頃に終わったのでいつもよりも時間をかけて昼食を作った。
久しぶりに倉庫から美味しい肉を取り出してきて薄くスライスしていく。
軽く湯通しして余分な油を取って葉っぱにくるむ。
それを鍋の中に入れて、普段使わない香辛料と庭で採れたハーブで味付けしたスープにたくさんの野菜を入れて弱火でコトコトと煮込んでいく。
お昼には少し肉と野菜を卵で閉じてご飯の上にかけて食べた。
野菜の歯ごたえと肉の柔らかさが美味しかった。
残りはさらに煮込んで夜のおかずにするため、いったん家の中へと片付ける。

食後の散歩に祠まで歩くと今日も茶色の毛並みが目に入った。
向こうも気づいたのか、伏せていた顔を上げてこちらを伺う。
鼻先をぴくぴくと動かして凝視してきたが、何も持っていないと態度で示すと、息を大きく漏らされて横を向かれた。
心なしか耳も垂れている。
機嫌を直そうと背中を撫ぜても、尻尾をぴしぴしと叩きつけてそっぽを向いたままふてくされたままだ。
その様子に笑いを漏らすと、ますます拗ねたのか、もっと強く尻尾を打ち付けられた。
仕方なく家から黄色の実をもってくると耳と尻尾を立てて手元を凝

視される。
現金だなと思った。
森を歩き回ったり、ねだられて撫でていたらあっという間に時間が過ぎていってしまい、名残惜しいけれど家に帰るために分かれた。
明日は梯子を組み立ててみようと思う。

7日

推理してみよう。
犯人の足跡は・・・・・・見つからない。
無理やり扉を開けた形跡は・・・・・・ない。
無くなっている物は・・・・・・野菜全般。
部屋の中には・・・・・・泥の跡。
目立つものは・・・・・・緑の糸もとい毛。

明らかに中に入られた形跡があり、目的のもの以外に荒らされた様子はない。
そして、家人にも気づかれず、尚且つ獣除けをかわす知能を持ったもの。

家から出て森の中を歩きながら考える。
その進む足取りに迷いはない。
これだけの証拠がそろっているのだ、【ヤツ】を知っているものなら直ぐに気づくだろう。
いや、むしろ【ヤツ】以外には不可能だ、ほかの選択肢がない。
目的地に着き、立ち止った視線の先には、茶色の毛皮をその身に纏った【ヤツ】の姿が。
【ヤツ】は、あろうことか目の前で野菜をぼりぼりと齧り、ご満悦そうに尻尾を左右に振っている。
祠につくと【ヤツ】はチラッとこちらを見たが、また食べ始めた。
気づいているのに堂々と食べ続けるとは、なんてふてぶてしいヤツだ。
近寄っていって怒っても知らん振りだ。
その態度が頭にきたので、怒った声を挙げる代わりに毛を数本毟ってやった。

さすがに懲りたのか目を潤ませてこちらを睨んでくる。
可愛いだけで迫力はないが。
ちょっぴりその様子が楽しいと思ったが、ごまかすために笑ったらおびえられた。
何か生き物としての第六感にくるものがあったらしい。
睨むのもやめて地面にペッたりとくっついた。

そのときは、大人しくなった理由が何でか思いつかなかったので不思議だった。
まぁ、反省したのなら良いだろうと、何の含みもなしに撫でたら一瞬体をこわばらせた。
ショックだった。
ただ、何もされないと分かったのかさっきまでの態度とは一点、甘えだす。
そのまま、今日も日が暮れるまで一緒に遊んでしまった。
あー、梯子作ろうと思ったのに。

8日

虫が目の前に置いてあった。
どうやら昨日のことは反省したようだ。
朝ベッドで覚醒して直ぐに虫と茶色の物体が見えた。
眼前には茶色の毛並みを持った脚の細い動物がおり、その足元に何十匹かの虫が塊となっている。
きらきらと見つめる目は褒めて褒めてといっているようで、覚醒しきっていない頭で考えた結果が、お詫びという名の虫の塊になったのだろう。
ありがとうと頭を撫でて、瓶の中に虫を放り込む。
丸々と太っていて美味しそうだ。
後でフライパンで炒って食べることにする。
お礼を言われて、目の前の動物は嬉しそうにしていた。
虫を入れた瓶を棚にしまうと、再び布団の中にもぐりこむ。
まだ布団に入っていたいんだ。
寝て起きたらあたりは暗くなっていた。
どうやら寝すぎたみたいで頭がぼんやりとする。
今からでは何もすることがないので、ご飯を軽く食べてまた眠りの世界にはいることにする。
……こんな日があっても良いよね。
まだ部屋にいた動物は何とかかまってもらおうと、服を引っ張ったり、鳴いたり、のしかかっていたけれど、梃子でも動かないと分かったのか森の中へと帰っていった。
ふぅ、と安堵の息を吐き出してから、体制を整えて夢の中へと入っていく。
何故だかあの動物のことはほっとけない。
おかげで、寝たふりをする羽目になった。

邪魔者がいなくなってせいか、それともいつもと違う時間に起きてしまったからか、ぐっすりと眠ってしまう。
次に起きたときには、とっくに昼ご飯を過ぎていたことには驚いた。
その後は、なかなか進んでいなかった梯子を完成させることができた。
歪な形だけれど、初めての割には上出来だろう。
試しに屋根まで登ってみたが問題なさそうだ。
これで、高いところにある木の実も採集できそうで、ひとまずは完了となった。

梯子を作るうえで協力して行ってくれたやつに、今度、好物の野菜スープを持っていってやろうと思う。

9日

森の中で人を見つけた。
何でなのか分からないけれど、ずぶ濡れの姿で倒れていた。よく見ると服の所々に、焦げた跡が残っている。
濡れた手袋を外すと、ひんやりとした冷気が伝わってきた。
これは良くないんじゃないかと思い、濡れて重くなった上着を脱がせて、慌てて家へと毛布を取りに行った。
今日は天気が良いから簡単には風邪を引かないだろうから、念のためだ。
毛布をかける前にタオルでしっかりと水を取る。
長い髪をしていたので大変かと思っていたのたが、軽く拭くだけでほとんどの水がタオルに移った。
毛布をかけて皺を整える。
暫くはその場に座っていたのだが、起きる様子がなかったので、放っておいて森の奥にある祠に遊びに行った。
日が沈む頃になっても動かなかったので、死んでいるのかもと心臓に耳を当てるとハッキリとした心音を聞き取ることができた。
安心したが、今度はこの倒れている人をどうやって運ぼうかと頭を抱える。
仕方なく、手伝ってもらって家までつれて帰ることにした。どうしても足を引きずる形になってしまったのは仕方ないことだと思ってほしい。
昼に整えたベッドの上になんとか引っ張り上げて寝かせた。
その日はハンモックを部屋に張り、その上に寝ることにした。ベッドで死んだように眠っている人に疑問はつきないが、答えられる者の意識がない今は、考えても仕様がないと思考に蓋をして眠ることにする。
明日おきれば良いなと思う。

ハンモックは寝ずらい。

１０日

伸び伸びと寝ることの叶わなかった体からポキポキと音が鳴った。
ハンモックを片付けて昨日拾ってきた人を見ると、長い髪を汗で顔に張り付けて眠っていた。
眉間に皺を寄せたままで苦しいのかたまに魘される。
手で触れると熱があるようだ。
汗をかいたままなのは良くないだろうと濡らしたタオルで体を拭ってやり服を着せてやる。
服が小さかったせいか足や腕などがはみ出ているが我慢してもらおう。
氷嚢と氷の入った水を用意する。
氷嚢は頭の上にのせ、氷水で冷やしたタオルを足置く。
着替えさせているときに気づいたのだが、足首が異様に熱くなっていた。
外傷はなかったのだが、その熱が傷をおったせいではないかと思わせた。
参考となることがないので良く知らないが、治癒する魔法は傷を塞ぐか解毒しかなかったはずだ。
見たところ傷はしっかりと癒えているので解毒されていれば熱を持つことはないだろう。
洗濯をして服を干しておく。
いつ目を覚ますか分からないから、身長に合った物をいつでも身につけられるようにしよう。

早く目が覚めてほしいと思う。
あまりこの場所に長居するのは良くないからね。
それに、いろいろ気になることの多い人だから話をしてみたいし。

１１日

足りない。
ご飯が足りない。
これはゆゆしき事態だ。
いつもだったら流浪の民の人に持ってきてもらったのだが……今は見知らぬ人が眠っているのだ。
流石に見知らぬ他人が家にいたら良い気分はしないだろうと思うのだ。
気にしなさそうではあるけれど。
しばらく頭を捻っていたが、ご飯が必要だという思いが強い。
仕方なく紙を机の引き出しから出してペンを用意する。
必要な物はっと書き留め、それをクルクル巻いてボトルに詰めこんだ。
席を立ち台所から銀盆を持ち出すとその中に水を垂らしてしばらく待つ。
やがて風もないのに水がさざ波、波紋を広げていった。
この盆は魔法がかかった特殊な品で遠くの相手に物や声などを届ける働きがあって、よく流浪の民との連絡に使う。
瓶を水の中に落とすと綺麗に水気を拭き取った。
これで暫くすれば食品を届けに来てくれるだろう。
まだ目の前の人は起きる様子がない。
昨日は息苦しそうにしていたが、今は穏やかな顔で眠っている。
もう大丈夫だろうと一瞥したあと外にでた。
散歩するついでに木の実も取ってこようと思う。

１２日

小さな子供が来た。
流浪の民が拾ったそうだ。
今日はいつもよりも豪華なご飯を作ることになった。
４人分も作ることになれていないので、手伝いだけだったけれど。
手際良く何種類もの料理がテーブルに並べられていく。
美味しそうな匂いが広がっていく。
子供は我慢できずつまみ食いをしていた。
無意識に羨ましそうに見ていたのだろう。
気づけば流浪の民によって口を塞がれていた。
美味しかった。
流浪の民は料理が上手だ。
色んな種類の食材を組み合わせて作られるので栄養も高い。
難点は食べなれない食材や味があることだ。
不味くはないのだがどうも変な感じがする。
そういえば眠っていた人が目を覚ました。
流浪の民が来たときに薬を飲ませたためだ。
昼に飲ませた薬が効いたのは夜になってからだったので一緒に夕ご飯を食べることになった。
寝起きは混乱していたが料理の匂いに気がつくと大人しくなった。
食いしん坊なのかなあと思った。
子供は流浪の民以外にはあまり近づこうとしなかったけれど、威嚇をするように尖った視線で周りを見極めようとしていた。
その様子が動物ぽくってちょっと可愛いと思ってしまった。
寝るときは流石に人数が多いので２人が外で寝ることになった。
部屋で子供と一緒にベッドに潜り込んだ。
子供は酷く嫌がったけれど、流浪の民に言い含められてしぶしぶといった態度で一緒に寝てやると言ってきた。

偉そうな物言いだったが、慣れていないのか端っこで縮こまっている。
可笑しくなって笑うと不機嫌そうな雰囲気になった。
何だかからかいたくなったので色々話しかけるとますます不機嫌そうになっていく。
それがまた楽しかった。
しまいにはお前見た目と違って性格わりぃなと言われてしまった。

13日

初めまして。
日がすっかり昇りきってから、今更ながらに眠っていた人と挨拶をしました。
起きたばかりの時より幾分か落ち着いて見えます。
結構背が高い人で、この部屋の中で1番でしょう。
昨日困惑した表情しかしていませんでしたが今は穏やかです。
きっと流浪の民から何か聞いたのでしょう。
心を落ち着けるのが得意な人ですから。
流浪の民が祠まで散歩に行くそうなのでついて行きました。
残りの2人も一緒です。
祠にはいつも会える動物がいませんでした。
残念です。
眠っていた人をそれとなく観察していると悪い人ではなさそうでした。
流浪の民も気に入っていたので確実だと思います。
旅をする上では善悪の区別がつかないとつらい目に会うことがあるからといっていました。
あまり人と触れ合う機会がないためよく分からないです。
割と打ち解けた空気の中、少年だけが一歩体を引いて歩いていました。
実際には一緒の速度だったけれど、気持ちの問題です。
仕方ないので、泉へと誘いました。
表情を緩ませないように頑張っていたけれど喜んで見入っていました。
真剣に覗き込んでいたのでついで気心で背中を押します。
すると盛大な水しぶきをあげて落ちました。
びっくりした顔と少し怒った顔が見れて楽しかったです。

喧嘩になりそうでしたが、美味しい木の実や一回り高い身長を使って宥めすかしました。
なかなか力が強かったので押さえ込むのが大変でした。

１４日

自由に飛べないかごの鳥。
それでもその鳥は幸せだったそうだ。

流浪の民はよくお話をしてくれた。
楽しいお話も悲しいお話も。
だいぶ顔色の良くなった人が吟遊詩人かと問いかけたら。
吟遊詩人ではありません、でもそうなのかもしれませんねと答えた。
その後もさまざまなお話しをしていたけれど、名前を名乗らなかったといって自己紹介をすることになった。
拾った人の名は、ジョン。
子供は顔を表面上は嫌そうにしながらも嬉しそうにダイオと名乗った。
そしてルー。
ルーは流浪の民の頭から取っているのだという。
今までは流浪の民と言っていたが、子供がルーと呼ぶので次からはルーと呼ぶ事にする。
子供っぽいとは思っていたけれど親しそうに愛称を呼ぶ姿がうらやましかったのだ。
自己紹介が終わるとジョンが改めて御礼を言ってきた。
たいしたことをしたつもりはなかったんだけれど・・・・・・。

その後の話し合いで決まったことは、ジョンが治りきるまでここにいることと、その間ルーとダイオも泊まることになった。
直接聞いたわけではなかったけれど、ジョンの怪我は人に傷つけられたものだろう。
万全ではない状態で外に出すのは危険だと判断したためだ。
ルーはというと、ジョンに興味があるしダイオはあまり人が得意で

はないそうだから、年が近いため話し相手や遊んでやってほしいとのことだった。
ついでに勉強も教えてくれれば楽なんだけどとも呟いていた。

それなりに動き回れるようになっていたので、ジョンを連れて木の実などを拾いに行く。
ジョンは博識で、知らなかったけれど食べることができる草などを教えてくれ、大変役に立った。
それと図鑑がなかったために名前を知らなかった動物たちのことも教えてくれる。
話しながらだったためいつもより時間がかかってしまったけれどなかなか楽しめた。
家に帰ったら、部屋が大きくなっておりベッドがひとつ増えていた。
いや、面積自体は大きくはなっていなかったのだが、中にあった家具がコンパクトな収納式になっていたりしてその分部屋が広くなったように見えたのだ。
ルーはいつもどおりだったけれど、ダイオは疲れたのかぐってりといすに腰掛けていた。
・・・・・力仕事が得意ではないはずだったのでほとんどダイオが頑張ったのだろう。
労いの意味をこめてご飯を多めにしてあげよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7241q/

日記

2011年10月8日00時25分発行